
民謡酒場の光景から

柳原 敏昭：東北大学文学部

1991年11月、初めて訪ねた沖縄の印象は鮮烈だった。

迷路のような公設市場にならぶ色とりどりの魚や豚の顔・足、広大な米軍基地、不気味に口を開ける壕（ガマ）、ひめゆり平和祈念資料館、県立平和祈念資料館……。しかし、とりわけ驚いたのは、いわゆる民謡（島唄）酒場で目にした光景であった。

民謡歌手がステージに立つと、店の一角に陣取った中高年の女性の目が釘付けにされる。歌手の一挙手一投足に、時にはうなづき、時には歓声をあげる。まるでアイドルに対する親衛隊のそれである。当惑させられるのは、ステージからフロアに投げかけられる言葉がまるでわからないことであった。しかしその言葉に確実に反応する観客たち。ステージが開放される時間ともなれば、若者が何曲も沖縄民謡を歌いまくる。そして、カチャーシーの乱舞。

はたと思った。自分は民謡を一体いくつまでも歌えるか？ - 無。ヤマトに地域の芸能スターはいるか？ - 否。世界か全国規模のスターしかない。

民謡酒場にはその後、二度足を運び、その度に同じような光景に出会った。沖縄出身の学生が普段とは別人のようになって、身も心もステージに没入させている姿を見て、感動をおぼえたこともあった。

以上の経験から私が得たとはいえずの結論は次のようなものである。沖縄では芸能を媒介としてアイデンティティが確固として作られていること。しかし一方、ヤマトでは、民衆レベルでアイデンティティが形成されるような基盤はなく、絶えず上からアイデンティティが押しつけられる状態にあること。

1996年1月、当重点領域研究の奄美研究会が開かれた際には、当地の島唄の第一人者の歌を聞く機会にも恵まれた。

大局的には、沖縄民謡と同じ作られ方をしているのであろうが、私にはかなりヤマト的な要素が混じっているように聞こえ、なによりも哀調を帯びた曲が多いという印象をもった。奄美のおかれた地理的な位置と歴史的條件の反映であろうか。私の中では、奄美のことを「北狄」と記した琉球史料との結びつきが気になってしょうがないのであるが。

当重点領域研究のメンバーに加えていただいたおかげで、もうひとつ芸能とは異なった“歌”を拝聴する機会を得た。1996年9月の平戸研究会における、生月島一部の方々によるオラショ奉唱である。

音楽学者の著作からその存在を知り、かねて関心を抱いていたものであっただけに、周到な解説付きでオラショを聞くことができたのは幸いであった。「ぐるりよざ」にいにしえのグレゴリオ聖歌の痕跡を確かめることができた瞬間の胸の高鳴りは今でも忘れられない。ここでは歌というものが、厳しい弾圧下で信仰を守る核の一つになり得ていたということに注目すべきであろう。この歌は決して芸能のそれではない。しかし、ヤマトでも歌うことによって強固なアイデンティティを作っていた時代があったことを確認できたような気がした。

以上は、私の鈍い感性が捉えた全くの印象論に過ぎない。しかし、歴史学がこういった領域までを問題にできるような方法論はないものかと、いつももどかしく思っている。とりわけ沖縄・奄美の研究にとっては大切なことなのではあるまいか。